IT資格道場

GCP ACE 学習用テキスト

予備知識ゼロから合格ラインへ ―― 読んで理解する1冊目

無料サンプル(第1章まで)

Associate Cloud Engineer Exam Guide(2026-06-30改訂版)準拠
2026年7月版

本書のご利用にあたって

- 本書は「IT資格道場」(www.shikaku-doujou.com)の購入者限定テキストのうち、学習用テキストの第1章までを収録した**無料サンプル**です。どなたでもご覧いただけます。
- 無料サンプルであっても著作物です。本書の転載・改変しての再配布・二次販売を禁じます。
- 本書を AI モデルの学習データとして利用すること(学習目的の入力・データセット化を含む)を禁じます。
- 製品版(学習用テキスト・暗記用ノート・頻出度別ノートの3点)は、ご購入者を識別できる透かし入りのPDFとして提供されます。
- 本PDFはスマートフォン・タブレットでの閲覧に合わせたA5版面・文字サイズで組版しています。

不正な配布を見つけた場合は info@shikaku-doujou.com までご連絡ください。

目次

はじめに —— この教材の使い方

このテキストは、Google Cloud の実務系入門資格 **Associate Cloud Engineer(略称 ACE)** に合格することを目的に作られています。Google Cloud を触ったことがない状態からでも、このサイトの 3 冊(学習用・暗記用・頻出度別)だけで合格ラインに届くように設計しています。

ACE はどんな試験か —— 「知っている」より「できる」を問う

同じクラウド資格でも、試験の性格はレベルによって違います。AWS の CLF(クラウドプラクティショナー)や Microsoft の AZ-900・DP-900 は**ファンダメンタルズ(入門)** で、「この用語は何か」「このサービスは何をするか」を答える**知識確認型**でした。

ACE はそれより一段上の**アソシエイト(実務)レベル**です。問われるのは大きく次の 3 つです。

1. **要件に合う製品を選べるか**(例:「グローバルに強整合な関係データベースが要る → どの製品?」)
2. **その操作の正しい手順・コマンドを知っているか**(例:「VM に SSH 接続する正しい方法は?」)
3. **問題が起きたときにどこを見て直すか**(例:「特定の操作を『誰が』行ったか調べたい → どのログ?」)

つまり ACE は「Google Cloud を使って**common な作業を実際にこなせる担当者**か」を確認する試験です。とはいえ本番は**すべて選択式(択一・複数選択)** で、実際にコンソールを操作させられたりコマンドを手打ちさせられたりはしません。ですから、手順やコマンドは「読んで意味が分かり、正しい選択肢

を選べる」水準まで持っていけば十分です。本テキストはそこに必要な内容だけを、公式の出題範囲(4 セクション)に沿って説明します。

AWS・Azure 経験者への橋渡し

このテキストは、AWS や Azure をある程度学んだ方が Google Cloud に乗り換える場面も想定しています。そこで各章に「**AWS でいう〇〇 = Google Cloud の△△**」という対応を随所に添えました。ただし対応は**あくまで目安**で、機能が完全に一致するわけではありません。特に紛らわしい箇所(プロジェクトの位置づけなど)は、単純化しすぎて誤解しないよう、違いも明記します。Google Cloud が初めての方は、対応表は読み飛ばしても構いません。

試験の基本情報

項目	内容
試験名	Google Cloud Associate Cloud Engineer(ACE)
出題数	50〜60 問(択一と複数選択)
出題形式	すべて文章問題。シナリオを読んで最適な選択肢を選ぶ(ラボ・実機操作・手入力はなし)
試験時間	2 時間(120 分)
合格ライン	**合否のみ(pass/fail)**。Google は合格点や分野別スコアを公開していない
受験料	125 USD(税別。国・地域により異なる)
受験方法	Pearson VUE。自宅からのオンライン監督(OnVUE)またはテストセンター
言語	英語・日本語・スペイン語・ポルトガル語

項目	内容
推奨経験	Google Cloud を用いた 6 か月以上の実務経験(必須ではない)
前提資格	なし(いきなり受験可)
有効期間	3 年(更新は 1 時間・20 問・75 USD の更新試験)

合格ラインは**非公開**です。ネット上には「70% 前後」といった目安が出回っていますが、これは公式の数字ではありません。分野ごとの足切りの有無も公表されていないため、**全分野をまんべんなく取りにいく**のが安全です。受験料・出題数・試験時間は改定されることがあるので、申し込み時に公式ページで最新情報を確認してください。

試験の設計図 —— 4 セクションと配点

ACE の出題範囲(公式 Exam Guide)は、4 つのセクションと配点比率を示しています。本書は **6 月 30 日に切り替わった現行版**(それまでの 5 セクション構成から作り直された新しい 4 セクション構成、ファイル名は063026)に準拠しています。

セクション	配点	中身を一言で
① 環境のセットアップ	**~20%**	土台づくり —— リソース階層・ID・API・課金
② 計画と実装	**~30%**	選んで作る —— コンピューティング・ストレージ・DB・ネットワーク・IaC
③ 運用の確実な遂行	**~30%**	動かし続ける —— 上記の管理・監視・ロギング

セクション	配点	中身を一言で
④ アクセスとセキュリティ	**~20%**	守る —— IAM とサービスアカウント

注目点は、**②計画と実装(~30%)と ③運用(~30%)が二大セクション**で、合わせて **6 割**を占めることです。この 2 つは扱う**製品が共通**しています —— ②は「どの製品を選び、どう作るか」、③は「作った製品をどう管理・運用するか」という**同じ製品を別の角度から**問うだけなのです。

そこで本書は、機械的にセクション順で並べるのではなく、**製品の領域ごと**(コンピューティング/ストレージ・DB/ネットワーク…)に章を立て、各章で「選ぶ・作る(②)」と「管理する(③)」の両方をまとめて扱います。このほうが知識がつながり、暗記も楽になります。

本書の構成(全 8 章)

- **第 1 章** 全体像・リソース階層・課金 … セクション①
- **第 2 章** IAM・サービスアカウント・セキュリティ … セクション④(+①の権限付与)
- **第 3 章** コンピューティング(Compute Engine)… セクション②・③
- **第 4 章** コンテナ(GKE・Cloud Run)… セクション②・③
- **第 5 章** ストレージとデータベース … セクション②・③
- **第 6 章** ネットワーキング … セクション②・③
- **第 7 章** 監視・ロギング・運用 … セクション③
- **第 8 章** IaC と AI 支援ツール … セクション②

第 3〜8 章が、二大セクション(②③=6 割)の中身です。ここに最も紙幅を割いています。

3 ステップ学習法

購入者限定テキストは 3 冊で 1 セットです。次の順番で使うと最短です。

- **STEP 1(理解する)**: 本書「学習用テキスト」を通読し、製品の地図と操作の勘どころを頭に入れる
- **STEP 2(覚える)**: 「暗記用ノート」の一問一答で、用語↔製品・手順の対応を即答できるまで繰り返す
- **STEP 3(仕上げる)**: 「頻出度別ノート」で頻出度 A の論点から総点検し、本サイトの問題演習で出題形式に慣れる

本書はやや長めです。フル通読が難しければ、先に「頻出度別ノート」で頻出度 A の論点を確認し、それを含む章から読み始めても構いません。

第1章 全体像・リソース階層・課金(セクション①)

最初のセクションは「Google Cloud という土地に、どうやって家を建てる前の整地をするか」です。**リソースの入れ物の作り方・階層・課金の紐付け**を押さえます。ここは他の全章の土台になります。

1-1 Google Cloud とは

Google Cloud は、Google が提供するクラウドサービス群です。サーバー(**Compute Engine**)、ストレージ(**Cloud Storage**)、データベース(**Cloud SQL** ほか)、ネットワークなどを、インターネット越しに使った分だけ借りられます。AWS、Microsoft Azure と並ぶ三大クラウドの一角です。

主な代表製品を、AWS・Azure の対応とともに俯瞰しておきましょう(**対応は目安**です。細部は各章で補足します)。

領域	Google Cloud	AWS(目安)	Azure(目安)
仮想サーバー	**Compute Engine**	EC2	Virtual Machines
コンテナ(Kubernetes)	**GKE**	EKS	AKS
サーバーレス・コンテナ	**Cloud Run**	Fargate/App Runner	Container Apps
イベント関数	**Cloud Run functions**	Lambda	Functions
オブジェクトストレージ	**Cloud Storage**	S3	Blob Storage
ブロックディスク	**Persistent Disk**	EBS	Managed Disks

領域	Google Cloud	AWS(目安)	Azure(目安)
リレーショナルDB(managed)	**Cloud SQL**	RDS	Azure SQL / DB for MySQL 等
データウェアハウス	**BigQuery**	Redshift / Athena	Synapse / Fabric
仮想ネットワーク	**VPC**	VPC	仮想ネットワーク(VNet)
権限管理	**Cloud IAM**	IAM	Entra ID + RBAC
監視・ログ	**Cloud Monitoring / Logging**	CloudWatch	Azure Monitor

1-2 リソース階層 —— 組織・フォルダ・プロジェクト

Google Cloud のすべてのリソース(VM やバケットなど)は、次の**階層**のどこかに属します。この階層は ACE で頻出です。

```
組織(Organization)        ← 会社全体の頂点(1つ)
  └ フォルダ(Folder)       ← 部門・チーム単位(任意・入れ子可)
      └ プロジェクト(Project) ← 実際にリソースを作る単位
          └ リソース          ← VM・バケット・DB など
```

- **組織(Organization)**: 会社の頂点にあたるノード。**Cloud Identity** または Google Workspace のドメイン(例: `example.com`)と結び付いて作られます。全社共通のポリシーをここでかけると、下の全プロジェクトに効きます
- **フォルダ(Folder)**: 部門やチーム、環境(本番/開発)ごとの中間の箱。**入れ子**にできます。必須ではありません

- **プロジェクト(Project)**: リソースを実際に作る**基本単位**。API の有効化・課金・権限は**プロジェクト単位**で管理します

AWS・Azure との対応(重要な注意つき):

- Google Cloud の**プロジェクト**は、リソース・課金・API・権限を束ねる独立した区切りです。**AWS の「アカウント」、Azure の「サブスクリプション」に近い**単位です。Azure の「リソースグループ」はサブスクリプションの中の軽いグループ分けで、プロジェクトより**一段細かい**単位なので、混同しないでください
- 階層全体は、**AWS の Organizations > OU > アカウント**、**Azure の管理グループ > サブスクリプション**に対応します

プロジェクトの 3 つの識別子

プロジェクトには 3 種類の名前があり、区別が問われます。

- **プロジェクト ID**: **全世界で一意・後から変更不可**の文字列(例: `my-app-prod-123`)。コマンドや API で使う実質的な鍵
- **プロジェクト名**: 人が読む表示名。重複可・変更可
- **プロジェクト番号**: Google が自動採番する数字。一意

1-3 組織ポリシーと IAM の関係

- **IAM(第 2 章で詳説)**: 「**誰に**何を**許すか**」を決める。人・グループ・サービスアカウントに役割(ロール)を与える
- **組織ポリシー(Organization Policy)**: 「**何を禁止・制限するか**」を階層にかける制約。たとえば「VM に外部 IP を付けることを全社で禁止」「利用で

きるリージョンを限定」といったガードレールを、組織・フォルダ・プロジェクトの各レベルで設定します

IAM が「アクセル(許可)」、組織ポリシーが「ガードレール(制限)」と覚えると区別できます。上位の階層でかけた制約は、原則として下位に**継承**されます。

ただし継承は固定ではありません。組織ポリシーは組織・フォルダ・プロジェクトの各レベルで設定でき、**既定では親のポリシーが子に及びますが、設定によっては子のレベルでより制限的な(あるいは緩和した)ポリシーに上書きできます**。「全社では禁止しておき、例外が必要な特定のプロジェクトだけ緩める」という運用ができるのはこのためです。IAM の許可ポリシー(上位で与えた許可は下位で弱められない)とは挙動が違うので、対にして押さえてください。

1-4 Cloud Identity —— ユーザーとグループの管理

Cloud Identity は、社員の**ユーザーアカウントとグループ**を管理する ID 基盤です(組織ノードを作るのに必要)。権限は**個人に直接ではなくグループに付け、人はグループに入れる**のが定石です。1 人ずつ設定すると管理が破綻するためで、これは AWS でも Azure でも共通の考え方です。ユーザーの作成は手動でも、社内の ID 基盤と連携した自動プロビジョニングでも行えます。

1-5 API の有効化とクォータ

- **API の有効化**: Google Cloud では、各製品を使う前にその**API をプロジェクトで有効化**する必要があります(例: Compute Engine を使うなら Compute Engine API を有効化)。「新しいプロジェクトでいきなり VM が作れない」ときの典型原因が、API 未有効化です
- **クォータ(quota)**: 「1 プロジェクトあたり VM 何台まで」のような**上限**。使いすぎや暴走を防ぐ安全弁です。上限に達したら、コンソールから**引き上げ**

をリクエストできます。「上限に当たった → クォータの引き上げ申請」が反射です

1-6 操作の入口 —— コンソール・gcloud・Cloud Shell

Google Cloud を操作する主な入口は次の 3 つです。すべて最終的には API を通ります。

入口	形態	向く場面
Google Cloud コンソール	ブラウザーの管理画面	手作業・学習・確認
gcloud CLI	コマンドライン	手順のスクリプト化・繰り返し
クライアントライブラリ	各言語用の部品	アプリのコードから操作

gcloud は Google Cloud の中心的なコマンドツールです。たとえばプロジェクトを指定するには次のように書きます(以降のコマンド例は、意味をつかむための最小の書き方です)。

```
gcloud config set project my-app-prod-123
gcloud compute instances list
```

Cloud Shell は、ブラウザーから使える**一時的な Linux 環境**で、gcloud や `kubectl` が最初から入っています。自分の PC に何もインストールせずに操作を始められる入口として便利です(AWS の CloudShell に相当)。

名前付き構成 —— 複数のプロジェクトを切り替える

gcloud には、プロジェクト・アカウント・既定のリージョンといった設定をひとまとめにして名前を付けておく**名前付き構成(configuration)** があります。開

発用と本番用のように複数の環境を行き来するとき、設定を打ち直さずに丸ごと切り替えられます。

コマンド	何をするか
`gcloud config configurations create <名前>`	名前付き構成を新規作成する
`gcloud config configurations list`	作成済みの構成と、どれがアクティブかを一覧表示する
`gcloud config configurations activate <名前>`	使う構成を切り替える
`gcloud config configurations describe <名前>`	指定した 1 つの構成の詳細を表示する

- **作成すると同時に既定でアクティブ化されます。**`create` した直後から新しい構成が使われるようになり、それまでの構成は非アクティブになるだけで設定内容が消えることはありません。作成だけに留めたいときは `--no-activate` を付け、**既存の構成同士をあとから切り替える**ときに使うのが `activate` です。ここはひっかけで問われます
- 名前付き構成は**各マシンのローカル設定であり、複数アカウント間で勝手に同期されるものではありません。**チームで同じ環境を再現したいときは、プロジェクト ID やリージョンなどの**値そのものを伝え、相手側でも `create` や `config set` を使って個別に作り直す**必要があります

1-7 課金の仕組み —— 課金アカウントと予算

Google Cloud の料金は**従量課金**(使った分だけ後払い)が基本です。課金まわりは次の部品で構成されます。

- **課金アカウント(Billing Account)**: 支払い方法(クレジットカードなど)を保持する入れ物。**プロジェクトを課金アカウントに紐付ける**ことで、そのプロジェクトの利用料が請求されます。1 つの課金アカウントに**複数プロジェクトを紐付け**られます。有料リソースを作ろうとしてエラーになるときは、課金アカウントが紐付いていないのが典型原因です
  - **課金アカウントの種類**は 2 つが基本です。クレジットカードなどでオンライン決済し、利用者自身が申し込み・管理する**セルフサーブ(オンライン)** と、主に大規模な法人向けで**月次の請求書**に基づいて支払う**インボイス(請求書)** です

- **予算(Budget)とアラート**: 課金アカウントやプロジェクトに**予算額**を設定し、「50%・90%・100% を超えたらメール通知」のように**しきい値で警告**します。**予算は自動で利用を止めるものではなく、あくまで通知**である点が頻出のひっかけです(止めたいなら別途の仕組みが要る)
  - **予算のスコープ(対象範囲)** は課金アカウント全体のほか、**プロジェクト・サービス(プロダクト)・ラベル**などの単位に絞り込めます。「特定のラベルが付いたリソースだけ」も可能です。一方で「従業員個人の人件費を按分する」といった会計的な機能は予算にはありません

- **「お支払い」レポート**: Cloud コンソールの「お支払い」画面は、**サービス・プロジェクト・SKU・ラベル**を切り口にコストの時系列グラフを画面上ですぐ確認できる標準機能です。SQL を書く必要がなく、まず費用を眺めたいときの一番手軽な入口になります
- **課金エクスポート(Billing Export)**: 詳細な請求データを **BigQuery** に出力し、SQL で細かく分析できます。「請求を部門別・ラベル別に詳しく分析したい」→ BigQuery へのエクスポート、が定番です。**「お支払い」レポートとは併用できます** —— エクスポートを設定したからといってレポート画

面が使えなくなることはありません。手軽に見るならレポート、より詳細・長期の分析が要る段階でエクスポート、という順で考えます

- **ラベル(Labels)**: リソースに付ける「キー:値」のメタデータ。分類・検索と**コストの集計**に使い、上で見た予算のスコープや「お支払い」レポートのフィルタの単位になります。**リソース名と違い、作成後でもいつでも追加・変更・削除できる**のが特徴で、変更のためにリソースを作り直す必要はありません(ラベルを変えても IP アドレスやネットワーク設定は変わりません)

コスト最適化には、長期利用を約束して割引を受ける**確約利用割引(Committed Use Discount)** や、中断を許容する代わりに大幅に安い**Spot VM**(第 3 章)があります。投資でいう「長期保有の約束と引き換えの優遇」に近い考え方です。

1-8 リージョン・ゾーンとリソースの範囲

Google Cloud のリソースは、地理的な「効く範囲」が 3 段階に分かれます。この区別は設計にも試験にも効きます。

- **リージョン**: 地理的な地域(例: `asia-northeast1` = 東京、`asia-northeast2` = 大阪)。低遅延や、データを特定地域に置く規制対応のために選びます
- **ゾーン**: リージョン内の、独立した設備の区画(例: `asia-northeast1-a`)。1 つのリージョンに複数のゾーンがあり、互いに障害を共有しにくく設計されています。高可用性のため複数ゾーンに分散します(AWS のアベイラビリティーゾーンに近い考え方)

そのうえで、リソースには**効く範囲**があります。

範囲	意味	例
グローバル	リージョンに縛られない	VPC、静的な外部 IP(グローバル)、イメージ
リージョナル	1 リージョン内(複数ゾーンにまたがれる)	サブネット、リージョン Persistent Disk、リージョン MIG
ゾーナル	1 ゾーン内だけ	Compute Engine インスタンス、ゾーン Persistent Disk

「VPC はグローバルだがサブネットはリージョナル」「VM はゾーナル」といった対応が、後の章でも繰り返し出てきます。新しい製品を使う前には、その製品が**目的のリージョンで提供されているか**を確認する習慣も大切です。

範囲の意味は「**どこから届くか**」です。グローバルなリソースはプロジェクト内のどのリージョン・ゾーンからでも参照でき、リージョナルなリソースは**同じリージョンの中であればゾーンをまたいで**参照でき、ゾーナルなリソースは**同じゾーンの中からだけ**参照できます。

自分のプロジェクトで使えるリージョンとゾーンは、コマンドで確認できます。

```
gcloud compute regions list
gcloud compute zones list
```

ゾーンの名前は「**リージョン名 + その中のゾーンを表す文字**」です。`us-central1` リージョンのゾーン a は `us-central1-a` になります。

> **細かいひっかけ**: 静的外部 IP アドレスには**リージョナルなもの**(VM やリージョン LB 用)と**グローバルなもの**(グローバル LB 用)の両方がありま

> す。「静的 IP はリージョナル」と丸暗記すると足をすくわれます。

1-9 組織リソースの手に入れ方 —— 2 つの経路

組織リソース(Organization resource) はリソース階層の最上位でした(1-2)。これは「作成」ボタンで好きなだけ増やすものではなく、**アカウントの作り方に応じて自動的に作られる**ものです。経路は 2 つあります。

1. **Cloud Identity または Google Workspace のアカウント**を作り、**DNS のドメイン**と結び付ける。企業での標準的な経路で、組織リソースは自動的に作成されます
2. **スタンドアロン組織**: Google のメールアドレスで Google Cloud にサインアップすると、**Cloud Identity なしで**組織リソースが自動的に作成されます。アカウントの持ち主には**組織のオーナー**のロールが与えられます。ただし**新規の無料トライアルの利用者だけ**が対象で、すでにある Google Cloud アカウントには提供されません

組織リソースを**持たない状態**(プロジェクトが個人のアカウントに属し、親が「組織なし」になっている)も存在します。「スタンドアロン組織=組織リソースはあるが Cloud Identity はない」「組織なし=そもそも組織リソースが存在しない」は別物です。

1-10 Cloud Asset Inventory —— リソースの棚卸し

Cloud Asset Inventory は、Google Cloud 上に**どのリソースが存在し、どんなポリシーが付いているか**をまとめて扱うグローバルなメタデータの目録サービスです。

- 扱う対象は**リソースそのもの**に加えて、**IAM の許可ポリシー・組織ポリシー・Access Context Manager のポリシー**まで含みます
- **プロジェクト・フォルダ・組織**のいずれの範囲でも一覧・検索できます
- **BigQuery や Cloud Storage へエクスポート**できます
- 作成・更新・削除の**履歴は最大 35 日間**保持されます。それより前にさかのぼりたいなら、定期的に書き出して自分で貯めておきます

「どこに何があるか分からない」を解くのが Cloud Asset Inventory で、「今どれくらい使われているか」を見る Cloud Monitoring とは目的が違います。現行の試験ガイドでは、ここに **Gemini Cloud Assist でリソースを分析する**(第 8 章)こと も並べて挙げられています。

1-11 外部の ID と連携する —— Workforce Identity Federation

社員がすでに社外の **ID プロバイダ(IdP)** で認証されている場合、その ID のまま Google Cloud を使わせることができます。

- **Workforce Identity Federation**: **人**(従業員・パートナー・契約社員)の ID を連携します。**OpenID Connect(OIDC)または SAML 2.0** に対応した IdP なら利用でき、Google Cloud 側に**ユーザーアカウントを保存しない**ため、ディレクトリ同期のツールが要りません。プールは**組織を指定して作成**し、その組織配下のすべてのプロジェクト・フォルダで使えます
- **Workload Identity Federation**: **ワークロード**(アプリケーション)の ID を連携します。サービスアカウントキーの代わりに使う仕組みで、プールは**プロジェクトの中に作成**します(詳しくは 2-6)

人か、ワークロードか。そして**組織レベルか、プロジェクトレベルか**。この 2 つの軸で覚えるのが最短です。

なお Workforce Identity Federation は IAM の機能なので、**IAM を使わない Google のサービス**(Google 広告など)へのアクセスには使えません。

第1章の試験ポイント

- 階層は **組織 > フォルダ > プロジェクト > リソース**。プロジェクト=リソース・課金・API・権限の基本単位(AWS アカウント/Azure サブスクリプションに近い。リソースグループとは別物)
- プロジェクト ID は**全世界一意・変更不可**。名前・番号と区別する
- IAM =許可(誰に何を)、組織ポリシー=制限(何を禁止)。上位の設定は下位に継承。ただし**組織ポリシーは子のレベルで上書きできる**(IAM の許可は下位で弱められない ―― 対で覚える)
- 製品を使う前に **API を有効化**。上限に当たったら**クォータ引き上げ申請**
- 権限は**グループに付ける**(Cloud Identity)。操作は Console / gcloud / クライアントライブラリの 3 入口、手軽な入口は **Cloud Shell**
- 複数プロジェクトの切り替えは **gcloud の名前付き構成**(`configurations create/list/activate/describe`)。`create` **は既定でその構成へ切り替わる**(既存の構成同士の切り替えに使うのが `activate`)
- 課金アカウントに**プロジェクトを紐付け**。種類は**セルフサーブ(オンライン決済)/インボイス(月次の請求書)**。**予算は通知であって自動停止ではない**。予算のスコープは**プロジェクト・サービス・ラベル**で絞れる
- 手軽な可視化は**「お支払い」レポート**(サービス・プロジェクト・SKU・ラベルでフィルタ)、詳細分析は **BigQuery へエクスポート**。**両者は併用可**

- **ラベルは作成後もいつでも追加・変更・削除できる**(変更不可のプロジェクト ID・リソース名と対比)
- リソースの範囲: **グローバル(VPC・イメージ)/リージョナル(サブネット)/ゾーナル(VM・ゾーンディスク・マシンタイプ)**。高可用性は複数ゾーンに分散。使えるロケーションの確認は `gcloud compute regions list` / `gcloud compute zones list` 。ゾーン名=**リージョン名 + 文字**(`us-central1-a`)
- 組織リソースの経路は 2 つ: **Cloud Identity/Workspace + ドメイン**、または**スタンドアロン組織**(Cloud Identity 不要・**新規の無料トライアルのみ**・オーナーのロールが自動付与)
- **Cloud Asset Inventory** = リソース + **IAM 許可ポリシー・組織ポリシー・Access Context Manager ポリシー**の棚卸し。プロジェクト/フォルダ/組織の範囲で検索、**BigQuery・Cloud Storage へエクスポート、履歴は最大 35 日**
- **Workforce Identity Federation = 人・組織レベル、Workload Identity Federation = ワークロード・プロジェクトレベル**。どちらも **OIDC / SAML 2.0** に対応

サンプルはここまでです

続き(第2章〜巻末)は、GCP ACE 問題集のご購入で、暗記用ノート・頻出度別ノートと合わせて3点すべてダウンロードできます。

GCP ACE 学習用テキスト(無料サンプル)

版
2026年7月版(Associate Cloud Engineer Exam Guide(2026-06-30改訂版)準拠)

発行
IT資格道場(https://www.shikaku-doujou.com)

お問い合わせ
info@shikaku-doujou.com